



創世ホールの休館について

■蔵書点検期間中の休館について

期間：6月15日(月)から6月25日(木)

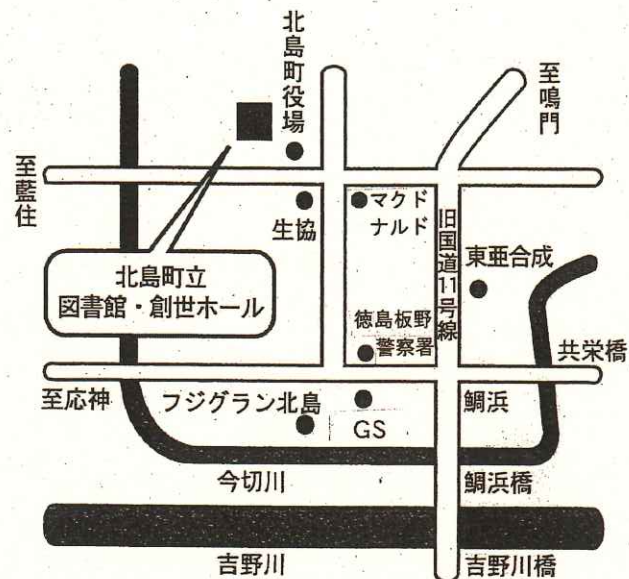
■1階図書館の蔵書点検に伴い、創世ホールを休館いたします。蔵書点検は所蔵資料を所定の位置に収め、不足がないかチェックする大切な作業です。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご理解、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

創世ホールに来場される方へ

▼入場される方には、マスクの着用と手指のアルコール消毒をお願いいたします。

▼観客同士の距離を一定の間に保つため、3階多目的ホールの座席数を減らしております。(前後左右を1席空けてお座りいただくようにしております)

■期間は令和2年9月30日(水)までとさせていただきます。なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



創世ホール名画鑑賞会vol. 32

『新聞記者』

日時：令和2年9月27日(日)

①午前10時30分/②午後2時

会場：3階 多目的ホール

前売り券の購入について、ただいま図書館カウンターでの販売は停止しております。カウンター及び電話での予約受付のみの取り扱い(前売り券の代金は開催日当日に、受付にてお支払いいただきます)となります。ご了承ください。

入場料：大学生・一般 前売1,000円(当日1,300円)

小・中・高 当日のみ1,000円

シニア(60歳以上)当日のみ1,000円

上映作品：『新聞記者』(2019年・日本・113分)

原案＝望月衣塑子『新聞記者』(角川新書刊)

出演＝シム・ウンギョン 松坂桃李 他

監督＝藤井道人

主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会

(☎088-698-1100)

■東都新聞の若手記者・吉岡(シム・ウンギョン)の元に届いた一通のFAX。そこには大学新設計画の極秘情報が匿名で告発されていた。■吉岡が独自取材を開始する一方で、「国民に尽くす」という使命感に燃える内閣情報調査室の官僚・杉原(松坂桃李)に、現政権に不都合なニュースをコントロールせよと命が下る。■真相究明にもがく新聞記者と、使命と任務の間で葛藤するエリート官僚。二人の正義が対峙するとき、衝撃の事実が明らかになる。

■原案は、2017年に官房長官会見で一躍脚光を浴びた気鋭の記者・望月衣塑子氏が、自身の記者としての歩みを綴った『新聞記者』(角川新書刊) ■第43回日本アカデミー賞に輝いた社会派エンタテインメント! 権力とメディアの裏側を描いた話題作です。多数、ご参集下さい。



創世ホール名画鑑賞会Vol.32

2020年9月27日(日) ①10:30 ②14:00 北島町立創世ホール



文化ジャーナル 300号達成記念★創刊号復刻掲載

文 化 ジャー ナ ル

濫澤龍彦のこと

■濫澤龍彦(しぶさわつひこ)が死んで7年。昨(1994)年12月25日、NHK教育テレビ「日曜美術館」で「幻想の王国～濫澤龍彦の宇宙～」が再放送された。これは同年5月に放送されたもので、相当大的な反響があったのだらうと想像される。筆者にとっても、見逃してくやしく思っていた番組なので、この再放送はたいそうありがたかった。この日朝食中に新聞のテレビ欄を眺めていて知り、朝っぱらから県内や東京の知人6人ほどに電話をし、「ぜひ見るように」と知らせ、もちろんビデオ録画もした。

■番組は、人形作家の四谷シモン氏が、鎌倉の濫澤龍彦邸を訪問し、濫澤が愛した美術作品を中心に回想し、その合間に巖谷國士(いわやくにお)氏や金子國義氏、池内紀氏、池田満寿夫氏、濫澤夫人の龍子さんなどのコメント(濫澤をめぐる回想)が挿入されるという構成だった。この番組でなんといっても貴重だったのは、動く濫澤の映像がみられたことだ。冒頭にサド裁判の際のニュース・フィルム、終盤に土方巽(ひじかたつみ)葬儀の際のVTRが流された。濫澤は小柄な人なのだが、実にさっそうとしていて誠に印象深かった。

■濫澤は、1986年1月の土方巽の葬儀で葬儀委員長を務めたのだが、そのあいさつでもポケットに手をつっ込んだままで「土方も私も昭和3年生まれで、同年代。初めて会ったのが20代後半だった。お互い若かった」という趣旨のことを話し、とにかく不敵。独特のかん高いハスキーな声を初めて聞いた。なんだか、ダンディズムに満ち、いかにも異端硬派の文学者然としており、カッコイイなあと思った。■この土方葬儀の8か月後(86年9月)、濫澤は咽喉ガンで切開手術を受け、以後声を失う。最後の小説「高丘親王航海記」(文芸春秋)は凄絶な闘病生活の中で書き上げられたものだ。物語の最後、天竺をめざす親王は旅の途中病に倒れてしまう。しかし、彼は奇策を用いてその夢を果たそうとする。親王は、虎に自らを喰われ、その虎の肉体を借りて天竺に行こうというのである。何という凄じい思想だろうか。

■濫澤龍彦は、1987年8月5日けい動脈瘤の破裂によって、入院先で読書中に死んだ。59歳だった。死の際は、夫人の手を握りしめたままだったという*1。親友のドイツ文学者・種村季弘(たねむらすえひろ)氏は、濫澤が、火山の観察中に噴火にあって死んだ博物学者プリニウスの死に方を理想としていたことになぞらえて、濫澤は体内に火山を抱えて最後はその爆発で世を去ったといえるのではないかと、だとすると、彼はプリニウスのように一自ら理想とする死に方で一死んだといってもよい、という趣旨のことを書き、追悼した*2。

■暗黒舞踏派の創始者・土方巽(ひじかたつみ)は医師からあと数時間の命である旨宣告されたとき、病室に友人や弟子たちを招き入れ、上半身をかかえ起こしてもらいながら、最後の踊りを踊ったのだ*3。この2人の死は、筆者には鮮烈である。濫澤や土方の存在は、死んでなお、いや時がたつにつれ、ますます重みを増してきているような気がしてならない。少なくとも私にとってはそうである。

■刊行中の『濫澤龍彦全集』(河出書房新社 全22巻別巻2)は、95年1月で20巻を迎えた。別巻2巻も含めて、あと4巻で完結する。筆者は個人的に毎月予約購読をしている。月々5,800円の出費は大変だったが、いよいよ完結すると思うと感慨深いものがある。特に、この全集は、はさみ込みの月報がすべて濫澤の友人・肉親のインタビューで構成されている力作で、貴重な証言記録の宝庫とでもいうものだった。全集の月報の単行本化というのは異例なことだろうが、すでに企画されているであろう『濫澤龍彦翻訳全集』とともに、いつの日か単行本として刊行されることを切に望みたい。(小西)

- ★1 平出隆「眠るひとの」(『現代詩手帖』1987年9月号所収)
- ★2 種村季弘「出棺の辞」(『濫澤さん家(ち)で午後五時にお茶を』1994年7月河出書房新社刊 所収)
- ★3 1990年2月1日NHK教育テレビ放送「ETV8/風の遺言—舞踏家・土方巽のめざしたモノ—」のラストのナレーションは次のようなものだった。「……土方の最後の舞台となったのは入院先の病院のベッドでした。医師からあと数時間の命と宣告されたとき、土方は親友や弟子たちを招き入れ、上半身をかかえ起こしてもらいながら、最後の舞踏を踊りました。それは土方の人生を閉じる最後の踊りでありながら、永世の世界に旅立つ踊りのようにみえました。それは蜘蛛のようにも、鳥のようにも、帝王の踊りのようにもみえたといわれています。この番組と、濫澤特集の「日曜美術館」は、もしかしたら同じ制作スタッフが関わっているのではないかと。この2本をセットにしてNHKから90分テープとしてビデオ発売していただけたらありがたいと思う。



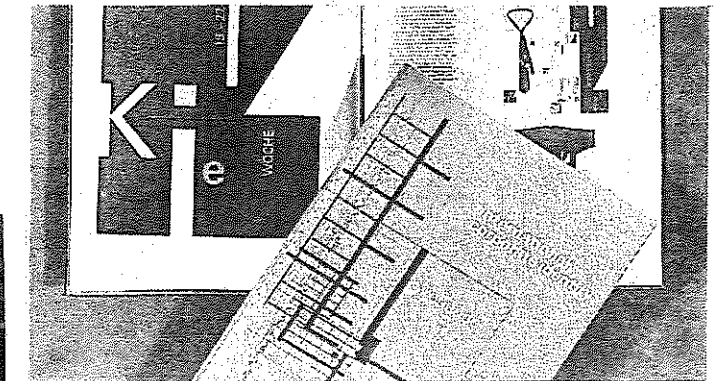
板東孝明氏の仕事

■徳島市在住のデザイナー・板東孝明氏が、ドイツ・キール市のデザインコンペで優勝した。板東氏は、『思潮』や『牧神』などの雑誌で端正な装丁を手がけた清原悦志氏に師事した人で、『寺山修司の戯曲』(思潮社)などの書籍の装丁の仕事も多数手がけており、最近では文化の森県立近代美術館の一連の企画展ポスターは氏のデザインによるものだ。また、ジャスト・システムの「一太郎」や「花子」のパッケージデザインや、同社の広告も氏の手による。

■読者のみなさんに身近かなところでは、徳島のタウン誌『あわわ』や『ASA』の表2に氏デザインのジャスト・システムの広告が掲載されている。関係者の話では、このページのモノクロ写真は4色分解による印刷なのだという。つまり、モノクロ写真の陰影などをより良く印刷するためにカラー(4色)ページでわざと白黒のプリントをしているというのだ。

■氏の仕事は、日本よりも海外で多くの注目を集めているが、東京で発行されている美術やデザインの雑誌などでは、あまり紹介されることもないようだ。こんなところにこの国の東京偏重主義的・サロンの閉鎖的な美術業界の体質がみえるような気がする。(小西)

*北島町立図書館には、氏が編集とブック・デザインを担当した『国際C1年鑑』(朗文堂)があります。この本は、世界中の優れたデザイナーの仕事を紹介したもので、ビジュアル面はもちろん、造本といい、文字の配列といい、とにかくその美しさに圧倒されます。ぜひご覧になってください。機会があれば、この「通信」で板東さんのインタビュー取材などもお届けしたいと考えています。



後記 ●「創世ホール通信」第1号をお届けします。北島町立図書館・創世ホールは、図書館、ハイビジョンシアター、文化財展示室、ギャラリー、多目的ホールなどを備えた複合文化施設です。これまで、「図書館だより」はありましたが、ホールやギャラリーの催しを伝える当館発行の情報紙がなかったので、小山所長と相談し、このような「通信」を発行することになりました◆B4ヨコ位置両面コピー形式で、1面に催しの案内、2面に「文化ジャーナル」という構成でやっていくつもりです。今後ともよろしくお願ひします。(担当/小西昌幸)

1995年2月号

「創世ホール通信/文化ジャーナル」は、二〇二〇年一月号で通算三〇〇号を達成しました。一九九五年二月に創刊しましたのでちょうど二十五年間毎月発行したことになります。その紹介記事は「徳島新聞」(二月九日、取材執筆/松村万由子記者)、「朝日新聞」徳島版(二月二十八日、福家司記者)にそれぞれ写真入りで掲載されました。三〇〇号達成を記念して、「文化ジャーナル」の「創刊号」を特別に復刻掲載します(小西昌幸) ★★★★★